

# 学生は大学の授業をどう認識し、何を求めているのか

～自由記述にみる率直な意見の分析～

西川 和夫<sup>1)</sup>・廣岡 秀一<sup>1)</sup>・中谷 素之<sup>1)</sup>  
後藤 淳子<sup>2)</sup>・矢神 祥代<sup>2)</sup>

本研究は、大学生による授業評価の評価項目の作成をするにあたって、学生が授業をどう認識し、何を求めているのかを明らかにしようとしたものである。大学3、4年生 3242名を対象に質問紙調査を行い、981名分の回答を得た。大学の授業を大きく5つに分類して満足度を評定させ、その理由とその授業に望むことを自由記述にて回答を求めた。授業と学部を要因とする分散分析を行った結果、授業の要因と所属学部による要因が同時に影響を及ぼすことが示された。自由記述で得られた意見7259項目をカテゴリに分類したところ、小カテゴリ数68、大カテゴリ数は8であった。小カテゴリから実用的、授業を通じた習得、形態、面白さを求める意見が多く見られた。また、意見を満足度によってネガティブ項目とポジティブ項目に大別したところ、ネガティブ項目からは、実用的、面白さ、熱意・意欲・態度、わかりやすさを、ポジティブ項目からは、形態、授業人数、選択の自由、開講授業の多様性を求める意見が多かった。

キーワード：学生による授業評価、自己点検、大学生、自由記述形式、FD

## I. 問題と目的

大学への進学率が60%を超え、大学全入時代といわれる今、大学教育に求められるものの変容や、社会からの要請を受けて、大学改革が各地で盛んに行われている。生き残りのかかった私立大学だけでなく、来る平成16年度からの大学法人化への移行を受けて、国公立大学も本格的にFD (Faculty Development) 活動、大学改革に取り組み始めた。

大学の教育内容の自己点検の一環としての学生による授業評価が多く大学で行われ、大学審議会もその答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」(平成10年10月26日)において、「教育の質の向上のため、自己点検・評価や学生による授業評価の実施など様々な機会を通じて、継続的に大学の組織的な教育活動に対する評価及び個々の教員の研究活動に対する評価の両面から評価を行うことが重要である」と述べているように、大学教育の質の向上のた

めには学生による授業評価はいまや必要不可欠なものとなってきた感がある。

アメリカ合衆国の大学では学生による授業評価は既に完全に定着しており、研究も非常に盛んに行われてきている。宇田ら(2002)によれば、過去の膨大な研究成果を要約すれば、この授業評価という方法は、概して評価として妥当なものであるという。つまり、授業評価と他の基準(例えば学生の成績、教員による自己評定、他者による評定)などの諸変数との間には、相関関係が認められる。そして、データの評定者間での一致性や妥当性も十分にあることが確かめられているという。東海大学での授業評価後に、教員に対して、結果をどう受け止めたかを調査した安岡ら(1994)の研究においても60%以上の回答者が「学生による授業評価は基本的に信頼できる」と考えているのに対して、信頼できないと答えたのは7.9%であったという。

一方で、学生による授業評価には問題点もいくつか指摘されている。宇田ら(2002)は過去

1) 三重大学教育学部 e-mail:shuhiro@edu.mie-u.ac.jp

2) 三重大学大学院教育学研究科 e-mail:junko@schl.edu.mie-u.ac.jp

の研究を概観し、授業評価は概して教員や学生の諸特性からは大きな影響を受けにくい、学生の受講動機や出席率などは明らかに影響を及ぼすと述べている。

それゆえ、学生による授業評価をとにかく行えばよいというわけにもいかず、どのような評価項目で、どのような時期に、どのような学生を対象に行い、どのように活用するかが難しい問題となっているのである。特に大学のカリキュラムには、語学や教養教育、専門授業など、授業のねらいや性格の異なるものが混在しているため、それぞれの教育効果を正確に測定するための評価項目については各大学で実に様々な工夫がなされている。

そこで今回は、基本的に教養教育の授業を受けてきた経験をもつ、3・4年生を対象を絞り、学生が大学の授業をどう認識し、何を求めているのかを明らかにするため、授業の満足度と、その理由、そしてそれぞれの授業に何を望んでいるのかを自由記述形式で回答してもらった。多くの授業評価についての研究にみられるように、用意した評価項目に沿って評価する形式ではないため、回答する学生にも時間と労力がかかるが、それだけにここに寄せられた意見は率直で、大学の授業をもっとよくしたいという学生の声が集まっているものと考えられる。

まずはそのような率直な意見を分析することによって、学生が授業をどう認識し、何を求めているのかを明らかにしたい。それを明らかにした上でこそ、学生の実感と現在の大学の実情によりフィットした授業評価の項目について考えることができるのではないだろうか。

## II. 方 法

### 1. 調査対象

M大学の3、4年生3242名を対象に、質問紙調査を行った。回収されたのは合計981名であり、全体の回収率は30.3%であった。その内訳は文系A学部150名(回収率22.7%)、文系B学部150名(回収率30.1%)、理系C学部80名(回収率19.4%)、理系D学部315名(回収

率29.4%)、理系E学部286名(回収率47.7%)であった。また、男性534名、女性447名であった。

### 2. 調査時期

2003年1月～2月に行った。

### 3. 実施方法

各ゼミで質問紙を配布し、その場または自宅で回答してもらった。

### 4. 質問紙の構成

大学における講義を学部専門授業、小集団授業、共通教育授業、語学系授業、情報系授業に分類し、各授業に対して「1. 非常に不満」から「6. 非常に満足」の6段階で満足度を評定させ、その理由を自由記述にて回答を求めた。また、その授業に対してどんな授業を望むかについても自由記述にて回答を求めた。

## III. 結果と考察

### 1. 満足度の分析

各授業に対する満足度の平均値を求め、学部別にまとめたものをFigure 1に示した。

この平均値を用いて、授業と学部を要因とする5×5の2要因分散分析を行った。その結果、授業×学部の交互作用( $F(16,2876) = 3.15, p < .01$ )と、授業の主効果( $F(4,2876) = 106.08, p < .01$ )が1%水準で有意であり、学部の主効果が5%水準で有意であった( $F(4,719) = 3.71, p < .05$ )。このことより、授業の満足度には授業そのものがどうであったかという要因と、評価する学生の所属学部による要因が同時に影響を及ぼしていると考えられる。所属学部による要因の中には、文系の学生、理系の学生それぞれの受け止め方というように学生個人に帰属される部分と、その学部のカリキュラムの中でそれぞれの授業の位置づけや学生の中での受け止められ方が異なるというような、学部の教学の性質に帰属される部分があると予想される。

同じ授業に対して同じ評価項目で評定をさせて

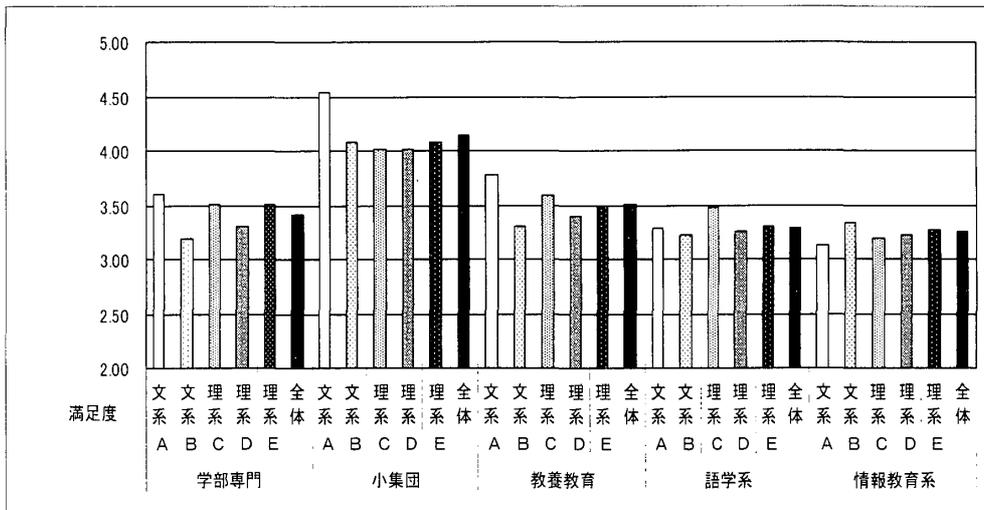


Figure 1 各授業に対する満足度の平均 (学部別)

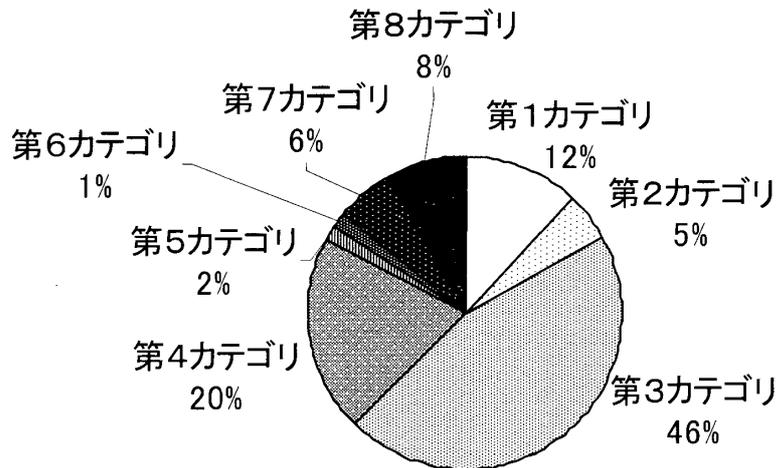


Figure 2 各大カテゴリが全体に占める割合

も、その結果には学部による差が生じることが予想されるため、授業評価に関して学部の教育内容や、所属する学生の傾向を考慮せずにとくに論じることは危険であることが示唆された。

## 2. 自由記述に寄せられた意見の分析

### 2-1. カテゴリの分類とその項目数の分析

学生が授業をどう認識し、何を求めているのかを明らかにするために、自由記述で学生から寄せられた意見をカテゴリに分類した。

カテゴリに分類するために、まず、一つの文章が一つの意見を表すように、単文形式に改めた。

教官について述べているもの、授業について述べているもの、など大きなカテゴリに分類し、

これを大カテゴリとした。さらに例えば授業という大カテゴリの中でも形態について述べているもの、方法について述べているもの、など小さなカテゴリに分類し、これを小カテゴリとした。分類は心理学を専攻する大学生・大学院生9名で行い、意見の食い違うものについては協議して分類した。

分類された項目数は7259項目、小カテゴリ数68、大カテゴリ数は8であった。その内訳をTable 1、円グラフで表したものをFigure 2に示す。

もっとも意見が多かったのは、やはり授業に関することであるが、次いでカリキュラム・シラバス・制度に関する項目、教官に関する項目が多く見られ、学生は授業を評価する際に、個

別の授業の授業内容だけを切り離して評価するわけではなく、全体的なカリキュラムにおける位置づけや、制度上のこと、教官についての評価も含めて総合的に判断していると考えられる。

よって、授業改善やFDに取り組む際には個々の教官の努力によって改善すべき部分と、大学として、または学部として改善すべき、カリキュラムや制度上の問題の両方を考えるべきであるといえるだろう。また、学生自身の受講

態度を自ら問題にしている意見も少なからず見受けられ、授業評価は従来いわれてきたように、学生が自らの受講態度や、授業で得たものについて振り返る機会にもなりうることが示唆された。

## 2-2. 自由記述に寄せられた意見の分析

自由記述に寄せられた意見を上記の手続きに従って分類したものがTable 2である。

Table 1 大カテゴリ内の小カテゴリ数と項目数、割合

大カテゴリ	小カテゴリ数	項目数	対全項目%
1. 教官の授業態度に対する評価	10	872	12.02
2. 教官の教育技術に対する評価	5	352	4.85
3. 授業内容に対する評価	25	3317	45.71
4. カリキュラム・制度・シラバスに対する評価	16	1476	20.34
5. 教育環境設備に対する評価	3	120	1.65
6. 大学としての評価	3	87	1.20
7. 学生の勉学に対する動機づけに対する評価	3	425	5.86
8. その他(分類不能)	3	610	8.41
計	68	7259	100.0

Table 2 カテゴリ分類とその定義、及び項目数、割合

1. 教官の授業態度に対する評価(教官の人物評価)	項目数	大分類に対する%
* 熱意・意欲・態度 教官の熱意や意欲、態度について	163	18.69
* 教官による時間の延長・短縮など 教官の授業への遅刻や終了時刻の延長について	31	3.56
* 教育者としての資質 学生から見た、教官が教育者としてもつ責任感などの資質について	64	7.34
* 研究者としての資質 学生から見た、教官が研究者としてもつ資質について	5	0.57
* 教官の評価基準(教官内一貫性) どのように学生を評価し、単位を認定するかという適切な基準を教官自身もっているかについて	42	4.82
* 教官の開講目的・目標の明瞭さ 教官が授業の目的や目標を学生にわかるよう説明をしているかについて	64	7.34
* 教官による授業の工夫 教官が授業をより分かりやすくする工夫をしているかについて	130	14.91
* 学生への個別対応 教官が必要に応じて、個人的な質問時間をもつなどして学生一人一人に指導しようとしているかについて	52	5.96
* 学生への対処 学生の授業態度に対して教官が対処しているかどうかについて	18	2.06
* 学生への関心・コミュニケーション 教官が学生に対して積極的に関心を持ち、またコミュニケーションをとろうとしているかについて	80	9.17
* 教官のその他 教官に関して言及しているもので上記のカテゴリに含まれない項目	223	25.57
計	872	100.0

学生は大学の授業をどう認識し、何を求めているのか

2. 教官の教育技術に対する評価	項目数	大分類に対する%
* 教官の教育技術 (字が汚い、声が小さいなど) 字が汚い・声が小さいなど、教官の教育技術について	68	19.32
* 指導力1 (話・説明のわかりやすさ) 教官が授業内容を学生にわかるように説明しているかについて	78	22.16
* 指導力2 (発言・質問のしやすさ) 教官が学生に発言・質問をする機会を与えているか、またそのような雰囲気をつくっているかについて	49	13.92
* 指導力3 (指導の丁寧さ・適切さ) 教官の指導・対応が丁寧であるか、適切であるかについて	108	30.68
* 教材・資料・教育機器に関する工夫 教官が教材・資料・教育機器を用いた工夫をしているかについて	49	13.92
計	352	100.0
3. 授業内容に対する評価	項目数	大分類に対する%
* 内容の幅広さ 授業で扱う内容の幅広さについて	43	1.30
* 授業名に対する内容の妥当性 授業名と実際に行われている内容が一致しているかどうかについて	14	0.42
* 工夫のある授業 授業がより分かりやすいものになるような工夫されているかについて	134	4.04
* 実践的 授業の内容が実践的であるかどうかについて	116	3.50
* 実用的 授業の内容が実用的であるかどうかについて	303	9.13
* 専門性 専門性、内容の深さについて	114	3.44
* 基礎 基礎的なことが学べる授業であったかについて	100	3.01
* レベル・難易度 授業の難易度が高すぎる、低すぎるなどの適切なレベルについて	104	3.14
* わかりやすさ 授業の内容の分かりやすさ、理解のしやすさについて	167	5.03
* 興味 授業の内容が興味をひくものであったかどうかについて	136	4.10
* 面白さ 授業の内容が面白かったかどうかについて	219	6.60
* テスト テストの範囲や難易度などに焦点があたっているものについて	21	0.63
* 課題 課題の量、その適切さ、課題に対する説明について	34	1.03
* テストや課題のフィードバック テストやレポートなどを学生にフィードバックしているかどうかについて	12	0.36
* 授業を通じた習得 授業を通じて知識や技術、能力などが身に付いたかどうかについて	220	6.63
* 資格、試験、就職対応 資格取得、能力検定、就職試験に直接対応しているかどうかについて	68	2.05
* 授業の進め方 「基礎から応用までの幅広い授業」など、時間的な流れを含んだもの	28	0.84
* 授業速度 授業の進むペースが適切であったかどうかについて	65	1.96
* レベル分け 学生のレベル・能力に合わせたクラス編成・グループ分けについて	27	0.81

*形態 授業がどのような形態をとっているか、例えば一方的な講義形式か、ディスカッションを取り入れているかなどについて	517	15.59
*雰囲気 授業の雰囲気について	15	0.45
*交流 他学部との交流やゼミ間の交流など、学生間の交流について	18	0.54
*教材・資料に対する評価 授業に使用したテキストや教材・資料の内容・量・適切さについて	63	1.90
*学外者、学外組織などの活用 実際に現場で活躍している学外の人を講師に招いたり、学外施設を利用する授業について	37	1.12
*授業のその他 授業に関して言及しているもので上記のカテゴリに含まれない項目	742	22.37
計	3317	100.0
<b>4. カリキュラム、制度、シラバスに対する評価</b>	項目数	大分類に対する%
*カリキュラム上の開講目的・目標の明瞭さ カリキュラム上でその授業の目的や目標を学生にもわかるように明確にしているかについて	24	1.63
*開講授業数 全体的な開講数、希望者の多い授業の開講数について	102	6.91
*開講授業の多様性 幅広い分野・多くの種類の授業が開講されているかどうかについて	178	12.06
*期間・時期 受講期間や必修期間（年次）、または時期の適切さについて	176	11.92
*選択の自由 受たい授業を受けることができる、選択の自由があるかどうかについて	220	14.91
*教官の配属 外国人の教官、専門の常勤教員の数、講師の配属などについて	70	4.74
*シラバスに対する評価 授業内容や使用教科書などがシラバスに詳しく明確にかかれているかなどについて	23	1.56
*必修 必修授業の適切さ、必須単位数の適切さなどについて	45	3.05
*単位 単位取得についてのもののうち、カリキュラムに関するもの	19	1.29
*制度としての評価基準の明確化 制度として評価基準の公平さ、教官間の評価基準の統一化について	39	2.64
*教官間の授業内容・評価基準の格差 授業内容や評価基準が教官によって差があるかについて	30	2.03
*他授業とのつながり・教官間の連携 教官同士がお互いの授業内容を把握しあっているか、他の講義との関連を考えた授業を行っているかについて	71	4.81
*授業人数 人数制限や小集団授業など授業の人数について	226	15.31
*授業の時間 授業のコマ数や一コマの長さなど授業の時間について	98	6.64
*カリキュラム全般 カリキュラムに関係するような全般的なことについて	119	8.06
*カリキュラムのその他 カリキュラムに関して言及している上記のカテゴリに含まれない項目	36	2.44
計	1476	100.0

学生は大学の授業をどう認識し、何を求めているのか

5. 教育環境設備に対する評価	項目数	大分類に対する%
* 受講制限 教室の大きさなどの都合による授業の受講に関する人数制限について	39	32.50
* 教室の環境 教室の環境（広さ、照明、防音等）について	31	25.83
* 設備 設備（パソコン数、本の数、部屋の数等）の充実について	50	41.67
計	120	100.0
6. 大学としての評価	項目数	大分類に対する%
* 大学としての評価 何かと比較するわけではなく、大学であるということについて	11	12.64
* 他大学との比較 大学の授業や制度などを他大学と比較しているものについて	3	3.45
* 中学・高校との比較 大学の授業や制度などを中学・高校と比較しているものについて	73	83.91
計	87	100.0
7. 学生の勉学に対する動機づけに対する評価	項目数	大分類に対する%
* 学生の興味 授業に対して学生が元々興味をもっていたかどうかについて	96	22.59
* 学生の資質 学生の授業態度など、学生の資質について	104	24.47
* 学生のその他 学生に関して言及しているもので上記のカテゴリに含まれない項目	225	52.94
計	425	100.0
8. その他（分類不能）	項目数	大分類に対する%
* 現状維持 今のままでよいなど、現状でよいとしている項目	135	22.13
* 特になし 特になしなどの項目	209	34.26
* 分類不能 上記のどのカテゴリにも当てはまらない項目	266	43.61
計	610	100.0

注目すべき小カテゴリの内容を見てみると「形態」については、語学の授業では、講読や文法の授業よりも会話を求めるものや、一方的な講義形式よりもディスカッションやプレゼンテーションなど学生参加型の授業を求める意見が多かった。

「授業人数」については少人数教育についての意見が圧倒的に多かった。ゼミだけでなく、専門科目、語学でも少人数を求める意見が多かった。

「選択の自由」については「共通教育の授業は好きなものを選べるからよい」や「もっと自由に選ばせて欲しい」という意見と、「語学の授業や先生を自分で選べないのが不満である」という意見が多かった。

「教官の意欲・態度・熱意」にも 163 もの意

見が寄せられ、学生は教官の熱意や、やる気があるかどうかにも注目して評価を行っている。

「教育者としての資質」は、学生がそのようなものを正確に判断することができるかという疑問はあるだろうが、「学生をバカにする態度をとる先生がいて腹がたった」、「先生によっては授業中に眠る人や急にどなって怒った人もいて人間的に?と思う授業もあった」などの意見が 64 項目も寄せられたため、カテゴリを設けることにした。

「教官による授業の工夫」、「資料・教材・教育機器に関する工夫」、「工夫のある授業」では、学生の理解を深めるために様々な工夫をされている教官の姿がうかがえ、工夫をすれば学生もそのことに対してよい評価をしているといえる。

今回は授業についての質問であったにもかかわらず、カリキュラムに関する意見も多く書かれていた。「開講科目の多様性」には、特に共通教育において「多様な科目が開講されているからいい／もっと多様な科目を開講して欲しい」という意見が多く見られ、「他授業とのつながり」では、「同じ科目名なのに先生によって差がありすぎるので何とかして欲しい」、「英語の内容をもっと学部専門授業につながるようなものにして欲しい」などの意見が見られた。

授業評価、授業改善といっても、個々の教官レベルで改善できるものばかりでなく、学部レベル、または大学レベルで取り組むべきものも多いことが示唆される。

「学生」については「授業を聞かずに寝てしまったりする学生も悪い」などの意見も見られ、授業評価アンケートが、答える学生自身の受講態度を見直すきっかけになりうると思われた。

どのような意見が多かったのかをみるために、小カテゴリを項目数が多い順に並べ、上位10位を示したものがTable 3である。

学生は授業を評価したり、または望ましい授業とは何であるかを判断する際に、授業の形態を最も重視しているということができる。「実用的」、「授業を通じた習得」が上位に来ていることから、社会に出てから実際に役に立つような技能、技術、知識の習得を求めていると考えられる。学生の意識の中でも大学の役割が旧来の研究者養成のための場というよりは、高度専門知識を持ち、社会で活躍できる人材育成の場というように変容してきたといえるのではないだろうか。

Table 3 小カテゴリ項目数における順位

順位	小カテゴリ	項目数
1	授業その他	742
2	形態	517
3	実用的	303
4	授業人数	226
5	学生その他	225
6	教官その他	223
7	授業を通じた習得	220
7	選択の自由	220
9	面白さ	219
10	開講授業の多様性	178

また、「形態」、「面白さ」のように、授業内容そのものに関連し、教官の努力や工夫で改善されるものと、「授業人数」、「選択の自由」など、学部や大学組織としての改善が必要なものがやはりここでも混在しており、学生は授業をカリキュラムや教学の内容と関連させて認識していることがここからも推測される。

### 2-3. 満足度との関連による分析

授業に現時点でどの程度満足しているかによって、学生が注目している点や、授業に対して求めているものに違いがあるかどうかをみるために、自由記述で得られた意見を満足度との関連によってネガティブ項目とポジティブ項目に大別した。

満足度を「1. 非常に不満」から「3. どちらかといえば不満」と評定した授業における自由記述を、その授業について不満を持つ学生の意見であるとみなし、ネガティブ項目、満足度を「4. どちらかといえば満足」から「6. 非常に満足」と評定した授業についての自由記述を、ポジティブ項目とした。ネガティブ項目は3268項目で、全体の49.2%であり、ポジティブ項目は3314項目で、全体の49.8%であった。授業に満足している学生からも、そうでない学生からも、ほぼ同じくらいの数の意見が集まったと考えることができる。

それぞれの意見を項目数が多い順に並べ、上位10位を示したものがTable 4である。

ネガティブ項目の上位にあげられたものは、不満を感じている理由を反映していると考えられる。「実用的」、「面白さ」、「熱意・意欲・態度」、「わかりやすさ」などが上位を占めており、学生はより実用的で面白く、わかりやすく、教官が熱意や意欲をもって取り組んでくれる授業を望んでいるといえるだろう。学生による授業評価に対しての批判のひとつに、学生の望むような授業をすれば、単位が楽に取れるものになってしまうという意見があるが、実際はそうともいえないだろう。

ポジティブ項目の上位にあげられたものは、満足を感じている理由をある程度反映していると考えられる。「形態」、「授業人数」は特に少

Table 4 ポジティブ・ネガティブ項目数における順位

順位	ポジティブ項目	項目数	ネガティブ項目	項目数
1	授業その他	360	授業その他	347
2	形態	225	形態	290
3	実用的	185	授業人数	151
4	期間・時期	121	学生その他	140
5	教官その他	120	選択の自由	137
6	面白さ	93	開講授業の多様性	133
7	熱意・意欲・態度	89	授業を通じた習得	131
8	わかりやすさ	87	面白さ	125
9	授業を通じた習得	87	実用的	116
10	選択の自由	83	教官その他	99

人数授業に対して満足している理由としてよくみられた。また、「選択の自由」、「開講授業の多様性」などは教養教育の授業に対して満足している理由としてよくみられた。「授業を通じた習得」、「面白さ」、「実用的」も上位に入っており、授業を通じてこのような実感を持った学生は高い満足度を得ていることが推察される。

### 3. 今後の課題

本研究では授業に対する満足度、満足・不満足の原因、授業に望むことを自由記述形式で回答させ、カテゴリに分類してその傾向を見た。

特に4年生にとっては卒業間近に実施したものであり、在学中に改善の恩恵にあずかれないにもかかわらず、全てに真剣に回答していた学生が多いという印象を受けた。日ごろから授業に対して抱いている、学生の率直な実感を集めることができたのではないだろうか。

ただ、今回の調査は個々の授業に対する評価ではなく、授業全般に対する評価をたずねた包括的なものであり、直接個々の授業改善に結びつく形にはなりにくい。今回の結果を生かして、学生の実感と、大学の実態に即した評価項目を考える必要がある。

また、学生による授業評価をどのように分析

し、改善に生かすのか、その仕組みをどのように作り上げていくかについても教官レベルだけでなく、学部レベル、大学レベルで広く議論していく必要がある。

### 引用文献

- 宇田光・片山尊文・中井良宏・山元有一  
2002 大学の授業改革に関する実践的探究—  
学生は授業評価をどう受けとめたか— 松阪  
大学紀要, 20 (1)
- 安岡高志・及川義道・吉川政夫・山本銀次・高  
野二郎・光澤舜明・香取草之助 1994 東  
海大学の自己評価の基本方針および学生による  
授業評価の信頼性に関するアンケート調査  
一般教育学会誌 16, 1

### 付 記

本論文は、5名の筆者の他、雨宮靖樹、大矢  
珠実、長谷要子、山崎恵、横矢規（三重大学教  
育学研究科 M2）、岡田涼、中山留美子（三重  
大学教育学部4年）で構成されるFD研究会で  
立案実施されたものを、筆者らが共同で執筆し  
たものである。